

神に呼ばれて

力は弱さの中でこそ

人生の転機となった病床洗礼



森 言一郎

もりげんいちろう  
北海道・稚内教区教師

## 『信徒の友』2014年6月号

私の故郷は大分県大分市の大在<sup>おおい</sup>という浜辺の村です。父が毎朝食卓でフツツと折る姿を見たり、祖父が母屋の縁側で賛美歌をひとり歌ったり、家族で開拓伝道（現在の大分東教会）に協力する環境の中で育ちました。「言一郎」という名はヨハネ福音書の「初めに言があった」という聖句によるものだと教えられていましたので、自分の立ち帰るべき所は幼いころから心に刻まれていたようです。

30年前、23歳で就職した海運会社のオフィスは東京駅八重洲口の真ん前にありました。1年目の秋、営業マンとして勤め先

から有楽町方面を歩いていると、カラリン・カラインと鳴り響く鐘の音が聞こえてきました。銀座教会の正午礼拝の始まりを告げる「銀座の鐘」でした。最初、教会が行っていた福音会英語学校「オフィス英会話」のクラスに入った私は、クリスマス会などを通じて、いつしか礼拝に通い始めたのです。ところが時期を同じくして、私は著しい体調不良を感じるようになります。母子感染によるB型慢性肝炎を発症していたので、今では特効薬として知られる薬が、まだ入院先の太学病院で試験的に使われる時代でした。2カ月の入院、職場への復帰、

また入院を繰り返し返す生活を3年ほど過ごし、その後も病のコントロールが難しい状態が続きました。体力もなく、仕事も失い、身を置く場所は教会だけと感じる日々でした。しかし当時の私にとって、教会の存在そのものが救いとなっていたのです。

1987年4月のイースターに私は洗礼を受ける準備をしていましたが、入院のためかなわず、後日、東京の下町にある病院のベッドの上で受洗しました。そこで与えられたのは視座の変化で、言い換えるならば方向転換であり、悔い改めでした。主治医がベッドの傍らに腰掛け、同じ視線で語

社人になって間もなく、B型慢性肝炎の発症に気付いた私は、弱さの中で自分にとっての教会の存在を再確認し、信仰へと導かれました。病も自分の大切な宝と知り、弱さを抱えながら病床伝道を志す牧師となって早20年以上。今は最北の町で、教会の皆で地域に根ざした教会形成と伝道に励みながら、神さまの導きの確かさをかみしめる日々です。

りかけてくださるとき、主イエスのまなざしを確かに感じていたのです。

あまりに単純な考え方もありませんが、やがて自分が死を迎えたとしても悔いのない人生を送りたいと願うようになりました。「主イエスからいただいた、神の恵みの福音を力強く証しするという任務を果たすことができさえすれば、この命すら決して惜しいとは思いません」(使徒20・24)。そんな熱い思いを抱き始めていました。

ある日、勇気を出して牧師にその思いを話しました。すると牧師は「それは召命です」と言われました。しかし、帰り道に私の文字でした。恥ずかしながら当時は「召



命」という言葉を知らなかつたのです。

やがて私は神学校に入学します。病を抱えていた私の献身は、客観的に見れば無謀なものだったかもしれない。しかし、神

学校を卒業してから既に20年以上が経過し、十数年前には肝炎完治の宣言を受け、今では定期検診だけで十分になりました。

私は病床伝道をして歩みだした者です。それゆえでしょうか。召命の原点に立ち帰るようになると促されること折々に起こりました。寄る辺ない病の方との出会いも多くありました。5年ほど前、私はストレス障害からの不眠とうつを経験し、苦悩の中、現場を離れました。回り道、挫折としか思

えないような全ての道が、今の伝道牧会の日々へとつながっているのを感じています。3年前、私は最北の地にある稚内に九州からやって来ました。「よく決心しましたね」と言われることがあります。でもこれは、私がたぐり寄せた何かによるのではなく、神さまの準備されたご計画なのです。稚内近郊の海ではうま味の濃いだしが出る利尻昆布が採れます。稚内教会では「利尻昆布バザール」の取り組みを1年前から始めました。地元の昆布を教会で切り分け、オリジナルの袋に入れ、日本各地の教会で購入していただいています。地元の名産品である「利尻昆布」と正面から向き合い始め、たこと、地域を愛する思いが深められ、教会の皆も誇りと喜びをもって笑顔で作業にあたっています。

利尻昆布はわずか10グラムほどでも、細く切り分けて水に浸けると美味い出汁が揮することは、私自身が受洗し、献身して用いられていることにも通じます。また「利尻昆布バザール」は礼拝出席十数名の最北の小さな教会に、多くの隣人を与えてくれる働きとなりつつあります。これもまた神のみわざ。そう確信するところです。 Q

